# 保護者の教育意識が障がい理解に与える影響
## ―学校教育への親しみと家庭での教育に着目して―

特別支援教育専攻
仁木　智輝　　指導教員　大谷博俊

### 第１章　障がい理解について

第１章では障がい理解の現状について述べた。

第１節では共生社会と障がい理解の関連について述べ、先行研究から障がい理解の概念は、障がいに関わる全ての事象に関係していること、障がいのある「人」への理解につながることを確認した。そして、障がいのある人への関わり方や考えをポジティブなものに変容する概念であると本研究でも規定した。

第２節はまず学校教育ではインクルーシブ教育が行われることを述べた。そしてインクルーシブ教育における、現在の障がい理解は、学校教育においては教育課程の改善につながることを指摘した。教育課程に障がい理解教育や交流及び共同学習を位置づけ、障がい理解を促進する重要性を述べた。

第３節では、障がい理解に影響を与える要因を明らかにすることが本研究の主題であることを述べた。先行研究では障がい理解に影響を与える要因として、接触経験・知識・社会の変化や性別を挙げ、これらの要因は複雑に絡み合い、研究の結果は必ずしも一致しないことを述べ、より個別的に検討を加える必要性を述べた。

### 第２章　学校での障がい理解の取組

第２章では、学校現場における障がい理解の取り組みを「教育」と「啓発」の点から述べた。

第１節は、学校教育では交流及び共同学習と障がい理解教育が互いに補完しながら、障がいに関した科学的な認識を高め、子ども同士の学び合いを目指すという目標を共有した「教育」を行っていることを確認した。このとき、児童生徒・教員・保護者などの当事者の意識を明らかにする必要があると指摘した。

第２節では、子どもが障がい理解をしても、その保護者の障がい理解によってはポジティブな態度の変容につながらないことを指摘し、「啓発」の必要性を述べた。そして学校では「教育」と「啓発」が組み合わさりながら行われることを示し、このことへの保護者の意識を明らかにする必要があることを述べた。

### 第３章　保護者の教育意識と子どもの学び

第３章では、保護者の学校及び家庭での教育への保護者の意識について述べた。

第１節では、まず本研究での保護者が学齢期、またはこれから学齢期を迎える子どもをもつ保護者であることを述べた。また、保護者の学校に対する意識について検討するとき、「教育意識」概念が用いられ、本研究では、教育意識を「教育もしくは学校教育に対する期待や感じ方」と定義した。そして、保護者の教育意識は、学校のどの領域に関わるかによって、意識に差が生まれることから、障がい理解教育については、どのような期待、感じ方をするのか、明らかにする必要を述べた。

第2節では、家庭での教育に対して、保護者がどのような意識をもつのか検討した。

保護者のもつ教育への養育態度や「指向性」は、子どもの人格及び行動形成に影響を与えることが示唆された。また、保護者の文化的な指向や行動が、子どもを取り巻く環境の形成を通じて、子どもの行動に影響を与えることが示唆された。

第4章　保護者の教育意識及び障がいのある人との接触経験と障がいのある人への態度との関連

保護者の教育意識及び接触経験と障がいのある子どもへの態度との関連を明らかにするため、質問紙調査を行った。調査対象者は子どもをもつ保護者100名であった。質問項目は保護者の属性について3項目、"障がいのある子どもへの態度"10項目、"教育意識"17項目であった。

"教育意識"について尺度の妥当性を検討した結果、学校教育への親近性(11項目)、文化的活動の重視(6項目)の2因子が抽出された。そして、教育意識の回答の平均値を基準とし、高低2群に分け、教育意識(高低2群)及び接触経験(有無2群)を独立変数、障がいのある子どもへの態度を従属変数とした、2要因分散分析を行った。その結果、学校教育への親近性・文化的活動の重視及び接触経験による差は有意ではないことが明らかになった。保護者の学校教育に関わろうとする意識や、家庭の文化的な環境を豊かにするだけでは、障がい理解には、つながらないことが示唆された。

第5章　保護者の教育意識及び保護者の接触経験と障がい理解教育への意識との関連

保護者の教育意識及び障がいのある人との接触経験と障がい理解教育への意識との関連を明らかにするために、"障がい理解教育への意識"10項目について、質問紙調査を行った。

"障がい理解教育への意識"について、尺度の妥当性を検証した結果、子どもへの教育期待(7項目)、自身の学習意欲(3項目)が抽出された。そして、教育意識(高低2群)及び接触経験(有無2群)を独立変数、障がい理解教育への意識を従属変数とした、2要因分散分析を行った。その結果、接触経験の有無が、子どもへの教育期待に影響を与えることが明らかになった。この結果から、接触経験の無い保護者は障がい理解教育を期待していることが示唆された。また、学校教育への親近性が、自身の学習意欲に影響を与えることが明らかになった。学校に親しみ、関わろうとする保護者の意識が、障がいについて学ぶ意欲に影響を与えることが示唆された。

第6章　研究のまとめと総合考察

本研究では、教育意識は、障がいのある子どもへの態度に影響を与えないことが明らかになった。また接触経験の有無が、子どもへの教育期待に影響を与えていること、学校教育への親近性が、自身の学習意欲に影響を与えていることが明らかになった。

特に学校が保護者の障がい理解を促すことにおいて、保護者が学校にどのような意識をもつのかを把握することが、重要であると考えられた。

第7章　研究の成果と今後の課題

本研究では、なぜ保護者が学校教育に親しむのか、障がい理解教育を期待するのかは把握していない。そのため、今後は、保護者が学校に親しむことや、子どもに障がい理解教育を期待することの、背景を検討する必要がある。